

第3次世界大戦の予兆か？

有隣堂の最新刊『ウクライナの現場から』12月27日発売

「戦争のリアル」と「世界の行く末」について、戦場ジャーナリスト佐藤和孝が考察する

株式会社有隣堂（本社：神奈川県横浜市 代表取締役社長：松信 健太郎）は、12月27日より、当社オリジナル出版物の最新刊として、『ウクライナの現場から』を発売します。著者は、横浜育ちのジャーナリスト、佐藤和孝。世界の紛争地域を40年以上取材してきた著者が、これまでの戦場経験を踏まえ、現場の状況や市民の様子をレポート。この戦争の本質、今後の世界について考えた好著。著者による現地撮りおろしの写真を多数掲載し戦争の現実を伝えます。

- 書名：『ウクライナの現場から』
- 著者：佐藤 和孝
- 出版社：有隣堂
- 定価：税込1,100円（本体1,000円＋税）
- 体裁：新書判・本文176頁
- 発売日：2022年12月27日予定
- 取り扱い：有隣堂各店（一部店舗除く）、全国の書店

内容

ロシアによるウクライナ侵攻間もない2022年3月、著者はウクライナに入国した。リビウ、キーウ、ブチャ、イルピン。そこには戦禍により、人生を狂わされた数多くの「一般市民」がいた。まず命を守るべきか？あるいは国（民主主義）を守るために戦うべきか？市民たちの生の声を取材、「戦争のリアル」と「世界の行く末」について今までの世界各地での現場取材を含め、戦場ジャーナリストが「現場目線」で考える。ウクライナ現地取材写真を多数収録。

目次

- 序章 ロシアのウクライナ侵攻を、なぜ許してはいけないのか
- 第1章 二〇万人の避難民を受け入れた市民たちの戦い
- 第2章 空襲警報と砲撃のなか、ウクライナは一つになった
- 第3章 ロシア軍の市民を狙った破壊と殺害の現場を見た
- 第4章 ジャーナリストとして、現地取材に思う
- 第5章 現在の戦況と六年前の東部ドネツク取材
- 第6章 歩いてきた戦場との比較から

著者：佐藤 和孝（さとう かずたか）

1956年北海道帯広生まれ。横浜育ち。ジャーナリスト、ジャパンプレス主宰・山本美香記念財団代表理事。24歳よりアフガニスタン紛争の取材を開始。その後、ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争、アメリカ同時多発テロ、イラク戦争などの取材を続け、2003年にはボーン・上田記念国際記者特別賞を受賞。

著書に『アフガニスタンの悲劇』（角川書店）、『戦場でメシを食う』（新潮新書）、『戦場を歩いてきた』（ポプラ新書）、『タリバンの眼』（PHP新書）などがある。



編集担当者が語る読みどころ

本書を執筆された佐藤和孝さんは、ロシアによるウクライナ侵攻間もない3月5日夜に、西部の都市リビウに入りました。その後戦跡を辿るようにキーウ、イルピン、ブチャの現場取材しました。ロシア軍に蹂躪された各都市には死者はもちろん、癒すことのできない心の傷を抱えた数多くの市民が残されていました。本書は現場に残された人びと一人一人に取材し、戦争の残虐性や虐げられる一般市民を活写しつつも、この戦争が一局地戦にとどまらず、第3次世界大戦へと至る導線となる可能性に言及しております。

また、著者は小学校4年生から30代の前半まで横浜の戸塚にお住まいでした。横浜にはひとかたならぬ思いがあり、そのご縁もあり、当社で出版することとなりました。現在、横浜市は50年以上にわたりウクライナのオデーサ市と姉妹都市の関係にあります。当出版部といたしましても、戦時下で懸命に生きる市民の姿を紹介するとともに、彼らを応援し、一日でも早く平和的解決が図られることを熱望いたします。

●有隣堂のオリジナル出版物のご紹介

有隣新書 <https://www.yurindo.co.jp/yurin/sinsho>

単行本 <https://www.yurindo.co.jp/yurin/tanko>

●情報紙『有隣』について

1967年12月創刊の情報紙。奇数月1日発行。

各界の一流執筆者による、神奈川の歴史・文化にちなんだテーマや、文学・芸術・時事問題などに関するエッセイ・論説を掲載。

電子版はこちらから <https://www.yurindo.co.jp/yurin/>
